

大阪歴史博物館所蔵の今熊野亀塚瓦経関係資料

―山根徳太郎旧蔵の拓本と瓦経片―（前編）

加藤 俊吾

要旨 難波宮の発見と研究で著名な歴史学者・山根徳太郎（一八八九―一九七三）の遺品のなかに数点の瓦経片と多数の拓本が含まれていた。山根自身が集めたと思われるこれらの資料はいずれも京都の今熊野亀塚瓦経のものであった。

今回、山根の所持していた瓦経資料の整理・検討をすすめた結果、そこに記録された破片数は二八点にのぼることがわかり、かつての二一の個体が推定できた。これはいまままでに判っていた今熊野亀塚瓦経の破片数にほぼ匹敵する数量である。これによって各所に散在する今熊野亀塚瓦経片の再評価ならびに復原の動きへとつながることが期待される。

一．はじめに

古代の宮都であった難波宮の発見と保存に邁進した歴史学者・山根徳太郎（一八八九―一九七三）。その遺品が現在大阪歴史博物館に収蔵されている。多くは難波宮調査に関連する文書群や個人的な記録などであるが、そのなかに瓦経の拓本と実物（破片）が含まれていた。多くの拓本には破片を採取した地名（「泉涌寺南谷出土」）とその所蔵者名が併記されており、その地名からは、破片の採取地が現在の京都市東山区今熊野にあったとされる亀塚を示していると考えられた。

今熊野亀塚瓦経の存在が斯界に知られたのは昭和元年（一九二六）のこ

とである「中村一九二六」。このころの山根は、それまで勤めていた兵庫県立神戸第一中学校の教職を辞して、日本史を学ぶために京都帝国大学へと通っていたはずである。一方、今熊野亀塚瓦経の発見に立ち会った中村直勝（一八九〇―一九七六）もまた京都帝国大学に勤務していた。したがって山根がこの情報に触れる機会は十分にあっただろう。だが、後に難波宮研究で名をさせた山根を、瓦経という遺物にすぐさま結び付けることは難しく、山根自身がどのような動機のもとに瓦経を蒐集したのか今となっては知る由も無い。

むしろここで注目したいのは、採集された瓦経が京都のものであるという点である。今熊野亀塚をはじめとする京都（市域およびその周辺）の瓦

経出土推定地は現在七箇所といわれている「杉山一九八五、八三頁」。そのうちのいくつかについては古くから知られていたものの⁽¹⁾、破片資料が多く、採集品がほとんどであったためか、その後発展的に取り上げられることはなかった。また、発見地の踏査が石田茂作など一部の研究者によって行われたが、こちらも有益な報告などはなされなかった。その後もいくつかの伝世品が網干善教や難波田徹らによって紹介されてはいるが「網干一九八二、難波田一九八〇」、あまりにもその数は少ない。

こうした状況にあった京都の瓦経研究において、分布論を起点とした検討を加えようとしたのが杉山洋である。杉山は「京都の瓦経」という論考「杉山一九八五」の中で、瓦経塚（またはその発見地）が近接して分布するという京都と良く似た別地域を選びだし、地域内の出土瓦経だけでなく、周辺で発見された経塚の出土遺物や瓦窯跡という事象に着眼、検討を行った。その結果、勧進僧と生産地という二つの要素が各地の瓦経造営に影響しており、特にそれぞれの地域において同一の勧進僧による造営である可能性を指摘した。杉山の指摘は、京都でも同様の造営が行われていたとの見通しを示唆するものであり、離散的状况にあった京都の瓦経に対する評価を別地域での検討結果から再帰的に行おうとする試みであったといえよう。だが、残念なことにそれ以降の進展はなく、京都の瓦経造営に関する議論は深められていない。その原因として、既存資料の離散的状况と新出資料の少なさを挙げることはそれほど奇異なことではないだろう。

これまでの先行研究の到達点をさらに咀嚼し昇華させるためにも、個々の資料に再度着目し基礎的な情報を明らかにすることから始めなければならない。山根資料の発見は、その契機として大いに注目されるものであり、今熊野亀塚瓦経以外の京都の瓦経研究にもあらたな知見をもたらすと期待

される。

以上の立場に基づき、先般来私は山根拓本の整理に着手してきた。その結果含まれる拓本三点を東京国立博物館所蔵品と同定するにいたった「加藤二〇一八、以下前稿とする」。この経験は山根資料の有用性を再認識することにつながったが、同時に、明らかにしえたものは山根旧蔵の瓦経資料群のうちの一部に過ぎず、全体の内容を公表することの意義をあらためて実感することとなった。

よって本稿では、前稿で触れることのできなかった山根資料の全容を紹介し、その校合結果について述べ、今熊野亀塚瓦経の復原に向けた基礎的作業をおこなっておきたい⁽²⁾。そして本稿において行う検討の方向性は、経塚研究の泰斗・石田茂作がかつて「瓦経の研究」「石田一九五八」において指摘した視点を踏襲する。すなわち、個々の瓦経片に刻まれた文字を判読し書写経典を特定するという手法であり、さらにその比較を通じて瓦板自体の割付や枚数などの復原を行うというものである。この方法はその後網干らによって深化していくが、その軌跡は判読内容や復原案を提示するという姿勢にあらわれている。このような個別資料の細部を確認・共有する操作の積み重ねが伝世資料の再評価ならびに新出資料の位置づけを可能にし、同様の操作を繰り返すことで最終的には出土推定地内での瓦経の全体像を描き出せるものと考ええる。

二・山根徳太郎旧蔵瓦経資料の構成

山根徳太郎旧蔵品が大阪市に寄贈されたのは平成八（二〇〇一）年度のことであった。そのなかに含まれていた瓦経関係資料の構成は、

第1表. 山根徳太郎旧蔵の瓦経拓本一覧

整理番号	枝番	細分	資料名	紙数	積読原稿用紙の標題	紙数	校合結果	巻数	拓本上の注記	備考	山根瓦経	破片記号
110	1		瓦経拓本	1	-	-	化城喻品第七	第三卷	「泉涌寺南谷出土丹羽氏蔵」	111-10 と同一破片。		ヌ
110	2		瓦経拓本	2	-	-	譬喻品第三	第二卷	なし	110-05 と同一破片。		ク
110	3		瓦経拓本	2	-	-	方便品第二	第一卷	なし	110-04 と同一破片。		キ
110	4		瓦経拓本	2	-	-	方便品第二	第一卷	なし	紙質悪い。110-03 と同一破片。		キ
110	5		瓦経拓本	2	-	-	譬喻品第三	第二卷	なし	紙質悪い。110-02 と同一破片。		ク
110	6		瓦経拓本	1	-	-	(小口面の丁付)	-	「泉涌寺南谷出土瓦経 丹羽氏蔵」	小口面のみ。「三六九」とあり、丁付とみなす。110-10・25 と同一破片。		ツ
110	7		瓦経拓本	1	-	-	譬喻品第三	第二卷	「泉涌寺南谷出土丹羽氏蔵」	110-21 と同一破片。110-15 にも載る。110-12、110-24 と同一個体(接合)。		コ
110	8		瓦経拓本	1	-	-	化城喻品第七	第三卷	「泉涌寺南谷出土丹羽氏蔵」	111-07 と同一破片。		テ
110	9		瓦経拓本	1	-	-	信解品第四	第二卷	「泉涌寺南谷出土丹羽氏蔵」	110-17 と同一破片。110-16 と同一個体(接合)。		タ
110	10		瓦経拓本	2	-	-	授記品第六	第三卷	なし	拓本は小口面(110-06)と片面(110-25の反対面)の組み合わせ。これにより110-06の丁付が三巻六枚目の意味とわかる。		ツ
110	11		瓦経拓本	1	-	-	方便品第二	第一卷	「泉涌寺南谷出土丹羽氏蔵」	110-23 と同一破片。		エ
110	12		瓦経拓本	1	-	-	譬喻品第三	第二卷	「泉涌寺南谷出土丹羽氏蔵」	110-22 と同一破片。110-15 にも載る。110-07、110-24 と同一個体(接合)。		サ
110	13		瓦経拓本	1	-	-	序品第一	第一卷	「泉涌寺南谷出土丹羽氏蔵」	111-01-②と同一破片。→校合の結果、109-04(実物)と同一個体となる。		ウ
110	14	①・②	瓦経拓本	1	-	-	譬喻品第三	第二卷		一紙に2個体分の採拓。111-09 と 111-06。		
110	14	①	瓦経拓本	-	-	-	化城喻品第七	第三卷		111-09 と同一破片。		ナ
110	14	②	瓦経拓本	-	-	-	譬喻品第三	第二卷	「泉涌寺南谷出土丹羽氏蔵」	111-06 と同一破片。丁付(「廿」)あり。		ス
110	15		瓦経拓本	2	-	-	譬喻品第三	第二卷	なし	3点(110-07、110-12、110-24)接合(?)を一紙で採拓。		コ、サ、シ
110	16		瓦経拓本	1	-	-	信解品第四	第二卷	なし	110-26-④(丹羽氏所蔵品)と同一破片で、110-09 と同一個体(接合)。110-28 にも載る。		チ
110	17		瓦経拓本	1	-	-	信解品第四	第二卷	なし	110-09(丹羽氏所蔵品)と同一破片。		タ
110	18		瓦経拓本	2	-	-	信解品第四	第二卷	「泉涌寺南谷出土田中氏蔵」			ソ
110	19		瓦経拓本	2	-	-	譬喻品第三	第二卷	「泉涌寺南谷出土瓦経 田中氏蔵」	110-14-②と同一個体である(=接合する)可能性が高い。		セ
110	20		瓦経拓本	2	-	-	譬喻品第三	第二卷	「泉涌寺南谷出土瓦経 田中氏蔵」			ケ
110	21		瓦経拓本	1	-	-	譬喻品第三	第二卷	なし	110-07 と同一破片。		コ
110	22		瓦経拓本	1	-	-	譬喻品第三	第二卷	なし	110-12 と同一破片。		サ
110	23		瓦経拓本	1	-	-	方便品第二	第一卷	なし	110-11 と同一破片。		エ
110	24		瓦経拓本	1	-	-	譬喻品第三	第二卷	「泉涌寺南谷出土瓦経 山根蔵」	110-15 にも載る。110-07、110-12 と同一個体(接合)。	未確認	シ
110	25		瓦経拓本	1	-	-	授記品第六	第三卷	「泉涌寺南谷出土丹羽氏蔵」	拓本は小口面(110-06)と片面(110-10の反対面)の組み合わせ。		ツ
110	26	①~④	瓦経拓本	1	-	-				4点分(うち1点は片面のみ)を同一紙上に採拓。110-16(上述)が含まれる。		
110	26	①	瓦経拓本		-	-	方便品第二	第一卷		111-04 と同一破片。		カ
110	26	②	瓦経拓本		-	-	薬王菩薩本事品第二十三	第七卷	「出所不明」	拓本は片面のみ。111-8-①と同一破片。		ノ
110	26	③	瓦経拓本		-	-	化城喻品第七	第三卷		111-8-②と同一破片。		ト
110	26	④	瓦経拓本		-	-	信解品第四	第二卷	「泉涌寺南谷出土瓦経 丹羽氏蔵」	110-16 と同一破片。110-09 と接合して110-28 となる。		チ
110	27	①・②	瓦経拓本	1	-	-				2点分(111-01の一点と、111-02)を同一紙上に採拓。		
110	27	①	瓦経拓本		-	-	提婆達多品第十二	第五卷	「出所不明」	111-01-①		ネ
110	27	②	瓦経拓本		-	-	序品第一	第一卷	「泉涌寺南谷出土丹羽氏蔵」	111-02		ア
110	28		瓦経拓本	2	-	-	信解品第四	第二卷	なし	(110-09) + (110-16)。接合資料らしい。		タ、チ
111	1	①・②	瓦経拓本および積文	1	「序品 第一八」	1		第一卷		2点分の拓本(表裏揃)が同一紙上に採拓される。110-27-①と110-13に該当。		
111	1	①	瓦経拓本および積文				提婆達多品第十二		「出所不明」	110-27-①と同一破片。		ネ
111	1	②	瓦経拓本および積文				序品第一	第一卷		110-13 と同一破片。積読原稿はこの破片のみが対象。109-04 と同一個体。		ウ
111	2		瓦経拓本および積文	1	「序品 三、四、五、」	2	序品第一	第一卷	「泉涌寺南谷出土丹羽氏蔵」	110-27-②と同一破片。		ア
111	3		瓦経拓本および積文	1	「序品 七」	2	序品第一	第一卷	「泉涌寺南谷出土瓦経 山根蔵」	111-01-②と同一個体。	109-4	イ
111	4		瓦経拓本および積文	1	「方便品 第二六〇」	1	方便品第二	第一卷		110-26-①と同一破片。		カ
111	5		瓦経拓本および積文	1	「方便品」	2	方便品第二	第一卷	「泉涌寺南谷出土瓦経 山根蔵」	積文原稿用紙その1の標題は方便品だが、その2の内容は譬喻品か。	109-3	オ
111	6		瓦経拓本および積文	1	「譬喻品 第三一四〇」、「譬喻品 第三一四三」	2	譬喻品第三	第二卷		110-14-②と同一破片。		ス
111	7		瓦経拓本および積文	1	「化城品 二一三 丹羽氏」、「化城品 二一四」	2	化城喻品第七	第三卷		110-08 と同一破片。		テ

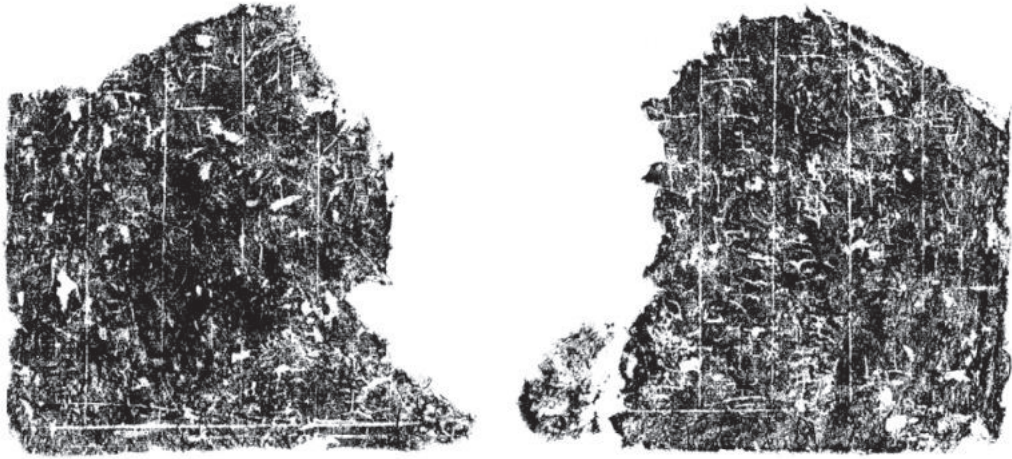
整理番号	枝番	細分	資料名	紙数	釈読原稿用紙の標題	紙数	校合結果	巻数	拓本上の注記	備考	山根瓦経	破片記号
111	8	①・②	瓦経拓本および釈文	1	「化城品 二二六」	2		第三卷		左記經典瓦経の他に1点分の拓本(片面のみ)が同一紙上に採拓される。		
111	8	①	瓦経拓本および釈文				薬王菩薩本事品第二十三	第七卷		拓本は片面のみ。110-26-②と同一破片。		ノ
111	8	②	瓦経拓本および釈文				化城喩品第七	第三卷		110-26-③と同一破片。釈読原稿はこの破片のみが対象。		ト
111	9		瓦経拓本および釈文	1	「化城喩品 第七 二四二」	1	化城喩品第七	第三卷		110-14-①と同一破片。		ナ
111	10		瓦経拓本および釈文	1	「化城喩品 第七 (二五〇頁)」	1	化城喩品第七	第三卷		110-01と同一破片。		ヌ
111	11		瓦経拓本および釈文	1	「化城品」	1	化城喩品第七	第三卷	「泉涌寺南谷出土瓦経 山根蔵」	裏面が白面なので、拓本も片面のみ(ただし2本載る)	109-1	ニ
111	12		瓦経拓本および釈文	2	「普門品 五五九」	2	觀世音菩薩普門品第二十五	第八卷	「泉涌寺南谷出土瓦経 田中氏蔵」	丁付(「八卷 二」)あり(下小口面)。109-02と同一個体。		ハ
111	13		瓦経拓本	1	-	-	觀世音菩薩普門品第二十五	第八卷	「泉涌寺南谷出土瓦経 山根蔵」	2片接合して採拓しているが、原品は接合されていない(109-02-01.02)。「普門品五五九」(111-12)と抱き合わされていた。	109-2	ヒ、フ

第2表. 個体の復原案

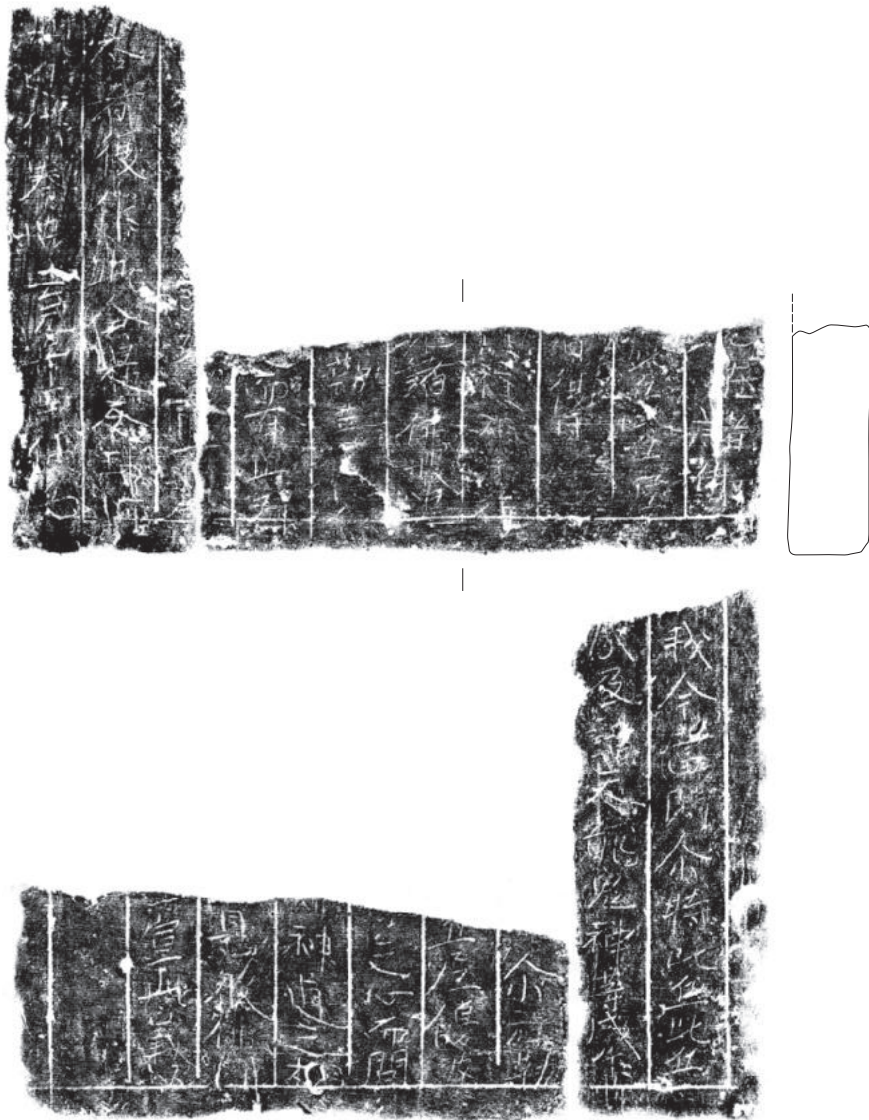
復原個体	対応する山根拓本	現存破片	校合	計算上の枚数	法量(高×幅×厚)	1行文字数	行数	実物旧所蔵者	実物所蔵機関	備考
A	110-27-2、111-2	不明	法華経第一卷 序品第一	二枚目か	-	17	9	丹羽氏	不明	
B	110-13、111-01-②、111-3	(No. 109-4)	法華経第一卷 序品第一	三枚目か	- × [195] × 22	17	10/9	丹羽氏、山根氏	大阪歴史博物館	
C	110-11、110-23	不明	法華経第一卷 方便品第二	十六または十七枚目か	-	17	10	丹羽氏	不明	
D	111-5	No. 109-3	法華経第一卷 方便品第二	十九枚目か	- × - × 16	17	10	山根氏	大阪歴史博物館	
E	110-26-①、111-4	不明	法華経第一卷 方便品第二	二十一枚目か	-	20	10	不明	不明	
F	110-3、110-4	不明	法華経第一卷 方便品第二	二十三枚目か	-	20	10	不明	不明	
G	110-2、110-5	不明	法華経第二卷 譬喩品第三	三枚目か	-	17	10	不明	不明	
H	110-20	東博 2178-③	法華経第二卷 譬喩品第三	九または十枚目か	- × 198 × 12	17	10	田中氏	東京国立博物館	
I	110-7、110-12、110-15、110-21、110-22、110-24	不明	法華経第二卷 譬喩品第三	十四または十五枚目か	- × [200] × -	17	10	丹羽氏、山根氏	不明	拓本 110-24 の実物は山根所蔵だったようだが、所在不明。
J	110-19、110-14-②、111-6	(東博2178-②)	法華経第二卷 譬喩品第三	二十枚目	244 × 198 × 17	16	10	丹羽氏、田中氏	東京国立博物館	110-14-②に丁付(「廿」)
K	110-18	東博 2178-①	法華経第二卷 信解品第四	二十二枚目か	241 × 196 × 18	17	10	田中氏	東京国立博物館	
L	110-9、110-16、110-17、110-26-④、110-28	不明	法華経第二卷 信解品第四	二十三枚目か	-	17	10か	丹羽氏	不明	
M	110-6、110-10、110-25	不明	法華経第三卷 授記品第六	七枚目か	- × 192 × 16	17	9か	丹羽氏	不明	110-6に丁付(「三卷」または「三 六」)
N	110-8、111-7	不明	法華経第三卷 化城喩品第七	十二枚目か	-	17	-	丹羽氏	不明	
O	110-26-③、111-8-②	不明	法華経第三卷 化城喩品第七	十七枚目か	-	17(20)	10	不明	不明	
P	110-14-①、111-9	不明	法華経第三卷 化城喩品第七	二十二枚目か	-	17か	10か	不明	不明	
P'	111-11	No. 109-1	法華経第三卷 化城喩品第七	*補遺分	-	17	-	山根氏	大阪歴史博物館	ウラ面文字なし
Q	110-1、111-10	不明	法華経第三卷 化城喩品第七	二十五枚目か	-	17	10	丹羽氏	不明	
R	110-27-①、111-1-①	不明	法華経第五卷 提婆達多品第十二	一枚目	-	17	10	不明	不明	
S	110-26-②、111-8-①	不明	法華経第七卷 薬王菩薩本事品第二十三	十二枚目か	-	-	-	丹羽氏	不明	
T	111-12、111-13	No. 109-2	法華経第八卷 觀世音菩薩普門品第二十五	二枚目	246 × 193 × 17	17	10	田中氏、山根氏	大阪歴史博物館	111-12に丁付(「八卷 二」)

【第2表 註】

- ・「法量」は、実物があるものは実物から、それ以外は拓本から採寸し、瓦板の復元に効果があるもの(または復元の蓋然性が高そうなもの)のみを記載した。なお、〔 〕がつく数字は復原値を示す。
- ・「現存破片」欄で () をつけたものは、実物を確認できていない同一個体破片の拓本が存在することを示す。



第1図 復原個体A



0 5cm
(1:2)

第2図 復原個体B

であり、判読したX面がオモテ面にあたると判断した。その配置案を以下に示す⁽⁶⁾。

- | | |
|---|--------------------|
| 1 | 師利菩薩觀世音菩薩得大勢菩薩常精進 |
| 2 | 菩薩不休息菩薩寶掌菩薩藥王菩薩勇 |
| 3 | 施菩薩寶月菩薩月光菩薩滿月菩薩大力 |
| 4 | 菩薩無量力菩薩越三界菩薩跋陀婆羅菩 |
| 5 | 薩彌勒菩薩寶積菩薩導師菩薩如是等菩 |
| 6 | 薩摩訶薩八萬人俱爾時釋提桓因與其眷 |
| 7 | 屬二萬天子俱復有名月天子普香天子寶 |
| 8 | 光天子四大天王與其眷屬萬天子俱自在 |
| 9 | 天子大自在天子與其眷屬三萬天子俱娑 |
| 1 | 婆世界主梵天王尸棄大梵光明大梵等與 |
| 2 | 其眷屬萬二千天子俱有八龍王難陀龍王 |
| 3 | 跋難陀龍王娑伽羅龍王和脩吉龍王德叉 |
| 4 | 迦龍王阿那婆達多龍王摩那斯龍王優鉢羅 |
| 5 | 龍王等各與若干百千眷屬俱有四緊那羅王 |
| 6 | 法緊那羅王妙法緊那羅王大法緊那羅王 |
| 7 | 持法緊那羅王各與若干百千眷屬俱有四 |
| 8 | 乾闥婆王樂乾闥婆王樂音乾闥婆王美乾 |
| 9 | 闥婆王美音乾闥婆王各與若干百千眷屬 |

拓本の観察において想定された小口面の残存は、この配置案を見る限り首肯されよう。一七字×九行で復原された配置案は、判読結果とは大きな矛盾はないものの、両面とも九行となる点は、後述する他の破片とやや様

相を異にする。また一部に一六字または一八字の行があるようだ。さらに、文字が非常に読みにくく判然としないが、瓦経原品ではウラ面二箇所脱漏があった可能性が高い。罫線の幅は一四〜一五mm、地側の匡郭外余白はオモテ面で一mm、ウラ面で八mmだった。

以上の文字数と行数をもとに經典上で割り付けた場合、おおむね同巻の二枚目に相当すると推定される⁽⁷⁾。

(二) 復原個体B (第2図)

結果的に破片二点(イ・ウ)から復原された個体。ひとつが山根瓦経(No.一〇九一四)で、この破片から採られた拓本には「山根蔵」の文字が記されていた。もうひとつは拓本(異本あり)で、そのうちのひとつには「丹羽氏蔵」の注記がなされる。二つの拓本の各注記は同じ筆跡で、同一人物のものと思われる。

瓦経片・拓本のいずれも刻字は細い。加えて表面の痛みもある。山根瓦経片は、高さ六二mm×幅一五二mm×厚二三mmを計り、地側のほか片方の袖側でも小口面を残す。焼成は軟調(土師質)だが胎土は緻密である。一方の拓本は高さ一四四mm×幅五二mmを測る。

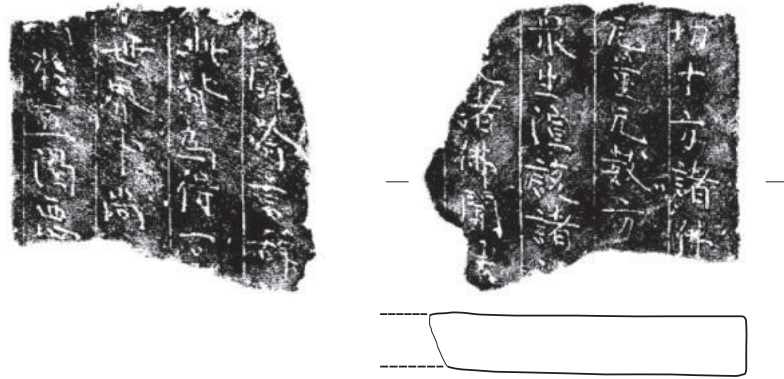
二つの破片を判読し、それぞれを大正大蔵経によって校合した結果、両者は接続し、法華経卷一「序品第一」に該当することがわかった。つなげた二片の判読内容と配置案を続けて示そう。判読したX面がオモテ面となると見られる。

《X面》

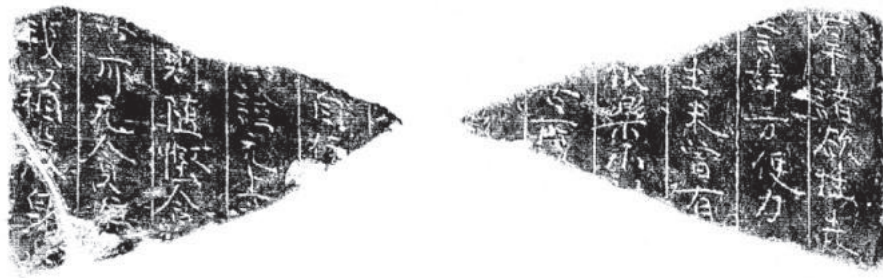
..... 在諸佛
..... □□比丘尼



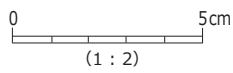
第3図 復原個体C



第4図 復原個体D



第5図 復原個体E



- 1 縁譬喩言辭而爲衆生演說諸法是法皆爲
- 2 一佛乘故是諸衆生從佛聞法究竟皆得一
- 3 切種智舍利弗是諸佛但教化菩薩欲以佛
- 4 之知見示衆生故欲以佛之知見悟衆生故
- 5 欲令衆生入佛知見道故舍利弗我今亦復
- 6 如是知諸衆生有種種欲深心所著隨其本
- 7 性以種種因縁譬喩言辭方便力而爲說
- 8 法舍利弗如此皆爲得一佛乘一切種智故
- 9 舍利弗十方世界中尚無二乘何況有三舍
- 10 利弗諸佛出於五濁惡世所謂劫濁煩惱濁

残存する文字が行内の何文字目に位置するのかが破片だけでは判断つかないが、ひとまず配置案のように復原した。X面がオモテ面となる。この復原案が正しければ、同巻の一九枚目に相当すると推測される。

（五）復原個体E（第5図）

異本の拓本二点をもつ破片力を含む個体である。拓本上の法量は高さ七二㎍×幅一一三㎍を測る。拓本を見る限り、袖側片方の小口を残すものと判断した。破片力の書体・刻線は、上述の個体D（破片オ）のそれによく似ている。判読結果は以下のとおりである。

《X面》

□干諸欲性先……………
 ……言辭方便力……………
 ……生未曾有……………
 ……樂小□……………
 ……所……………

《Y面》

……………自□……………
 ……證无上……………
 ……則隨□□……………
 ……亦无貪□……………
 ……我以相□身□……………

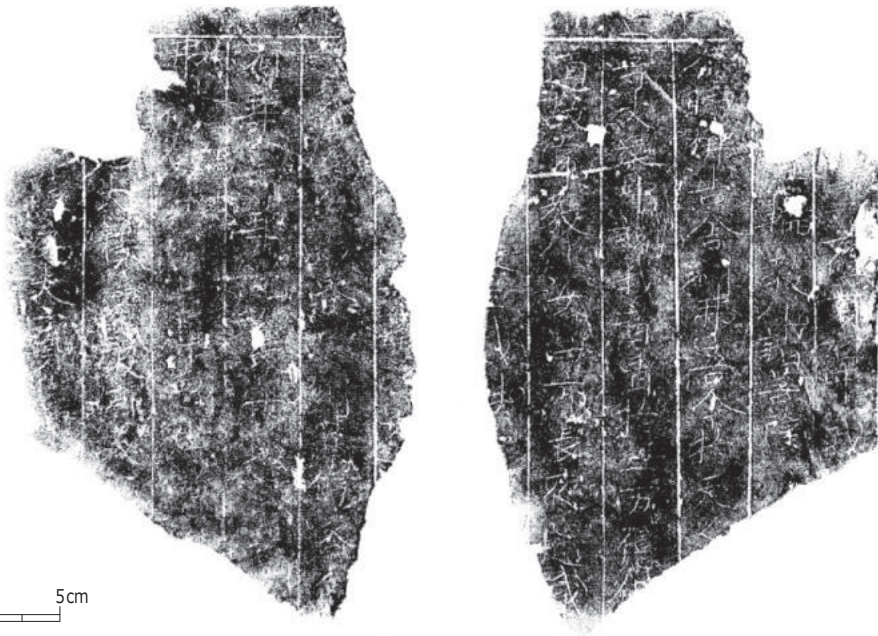
これをもとに大正大藏経で校合した結果、法華経卷一の「方便品第二」であると考えられた。その配置案を以下に示す。

- | | | | | |
|----|-------|-------|-------|-------|
| 1 | 衆生心所念 | 種種所行道 | 若干諸欲性 | 先世善惡業 |
| 2 | 佛悉知是已 | 以諸縁譬喩 | 言辭方便力 | 令一切歡喜 |
| 3 | 或說修多羅 | 伽陀及本事 | 本生未曾有 | 亦說於因縁 |
| 4 | 譬喩并祇夜 | 優波提舍經 | 鈍根樂小法 | 貪著於生死 |
| 5 | 於諸無量佛 | 不行深妙道 | 衆苦所惱亂 | 爲是說涅槃 |
| 6 | 我設是方便 | 令得入佛慧 | 未曾說汝等 | 當得成佛道 |
| 7 | 所以未曾說 | 說時未至故 | 今正是其時 | 決定說大乘 |
| 8 | 我此九部法 | 隨順衆生說 | 入大乘爲本 | 以故說是經 |
| 9 | 有佛子心淨 | 柔軟亦利根 | 無量諸佛所 | 而行深妙道 |
| 10 | 爲此諸佛子 | 說是大乘經 | 我記如是人 | 來世成佛道 |
| 1 | 以深心念佛 | 修持淨戒故 | 此等聞得佛 | 大喜充遍身 |
| 2 | 佛知彼心行 | 故爲說大乘 | 聲聞若菩薩 | 聞我所說法 |
| 3 | 乃至於一偈 | 皆成佛無疑 | 十方佛土中 | 唯有一乘法 |
| 4 | 無二亦無三 | 除佛方便說 | 但以假名字 | 引導於衆生 |
| 5 | 說佛智慧故 | 諸佛出於世 | 唯此一事實 | 餘二則非眞 |
| 6 | 終不以小乘 | 濟度於衆生 | 佛自住大乘 | 如其所得法 |
| 7 | 定慧力莊嚴 | 以此度衆生 | 自證無上道 | 大乘平等法 |
| 8 | 若以小乘法 | 乃至於一人 | 我則墮慳貪 | 此事爲不可 |
| 9 | 若人信歸佛 | 如來不欺誑 | 亦無貪嫉意 | 斷諸法中惡 |
| 10 | 故佛於十方 | 而獨無所畏 | 我以相嚴身 | 光明照世間 |

当該箇所は五字一句の偈文で構成されるため、一行を二〇字として復原



第6図 復原個体F



第7図 復原個体G

1 疑悔永已盡安住實智中我定當作佛爲天人所敬
 2 轉無上法輪教化諸菩薩
 3 爾時佛告舍利弗吾今於天人沙門婆羅門
 4 等大衆中說我昔曾於二萬億佛所爲無上
 5 道故常教化汝汝亦長夜隨我受學我以方
 6 便引導汝故生我法中舍利弗我昔教汝志
 7 願佛道汝今悉忘而便自謂已得滅度我今
 8 還欲令汝憶念本願所行道故爲諸聲聞說
 9 是大乘經名妙法蓮華教菩薩法佛所護念
 10 舍利弗汝於未來世過無量無邊不可思議
 1 劫供養若干千萬億佛奉持正法具足菩薩
 2 所行之道當得作佛號曰華光如來應供正
 3 遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫
 4 天人師佛世尊國名離垢其土平正清淨嚴
 5 飾安隱豐樂天人熾盛琉璃爲地有八交道
 6 黃金爲繩以界其側其傍各有七寶行樹常
 7 有華菓華光如來亦以三乘教化衆生舍利
 8 弗彼佛出時雖非惡世以本願故說三乘法
 9 其劫名大寶莊嚴何故名曰大寶莊嚴其國
 10 中以菩薩爲大寶故彼諸菩薩無量無邊不

オモテ面（X面）の開始二行は偈文であったため一行二〇字で復原した。
 二行目の最終句が行の中途で完結する配置を採っていたようだ。それ以外
 は一七字で、行数は各面一〇行とみなせる。配置案をもとに枚次の復原を

試みたところ、三枚目または四枚目に相当するとみられる。
 罫線幅は各面とも一八〜二〇mmであった。天側匡郭外の余白は九mmであつた。両面とも袖側匡郭線は認められなかった。

（八）復原個体H（第8図）

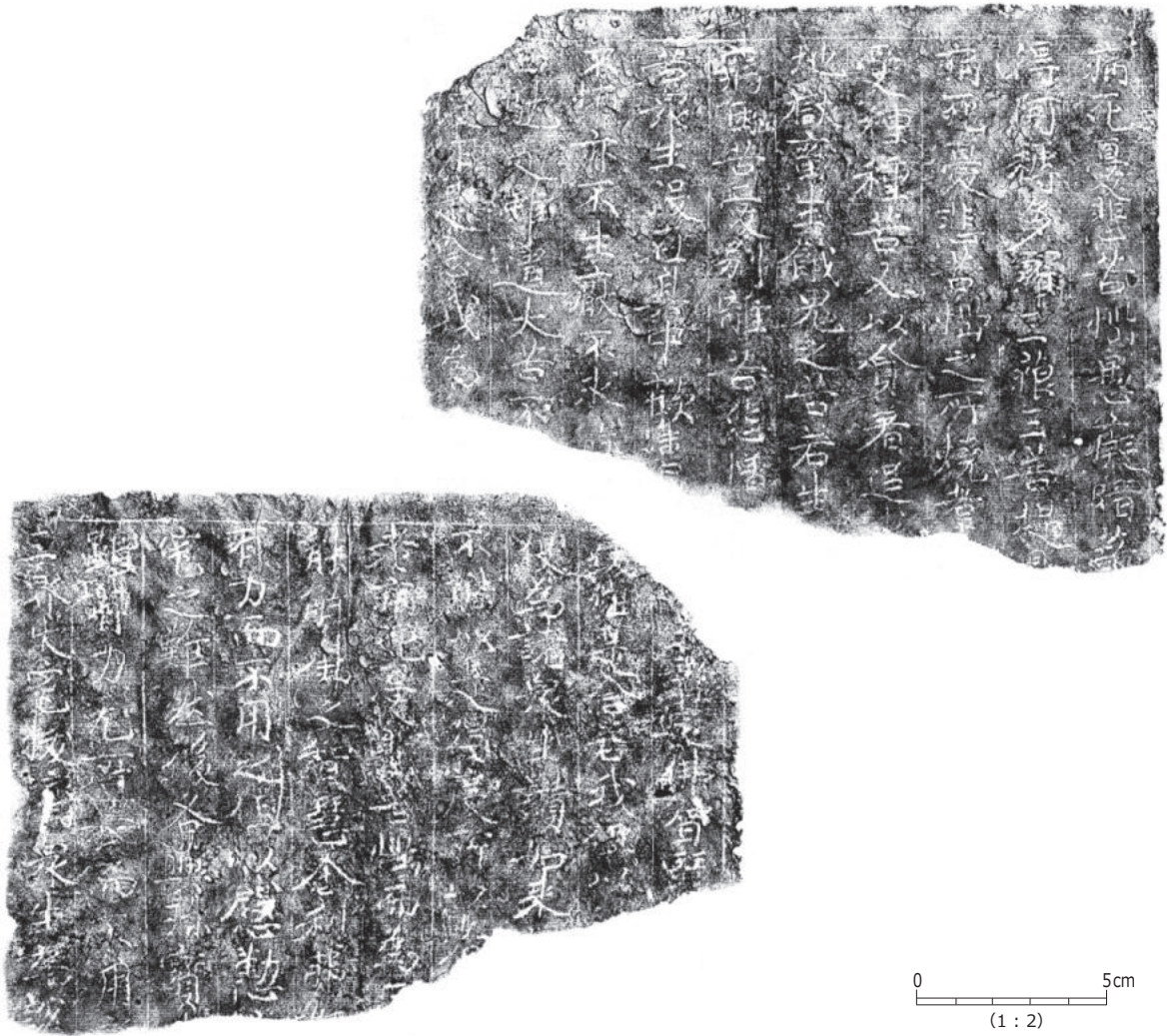
山根拓本一点（破片ケ）を含み、かつその原品が東京国立博物館所蔵破片（B―二一七八―三）である個体。当破片についてはすでに判読内容と配置案を提示したが、以下に前稿からの訂正も含めて再掲する⁽⁹⁾。

《オモテ面》

病死憂悲苦惱愚□暗□……………
 得阿耨多羅三藐三菩提□……………
 病死憂悲苦惱之所燒□……………
 受種種苦又以貪著起□……………
 地獄畜生餓鬼之苦若生……………
 窮困苦愛別離苦怨憎……………
 苦衆生□在其中歎^(苦力)……………
 不怖亦不生厭不求□……………
 西馳走雖避大苦不……………
 ……便作是念我為□……………

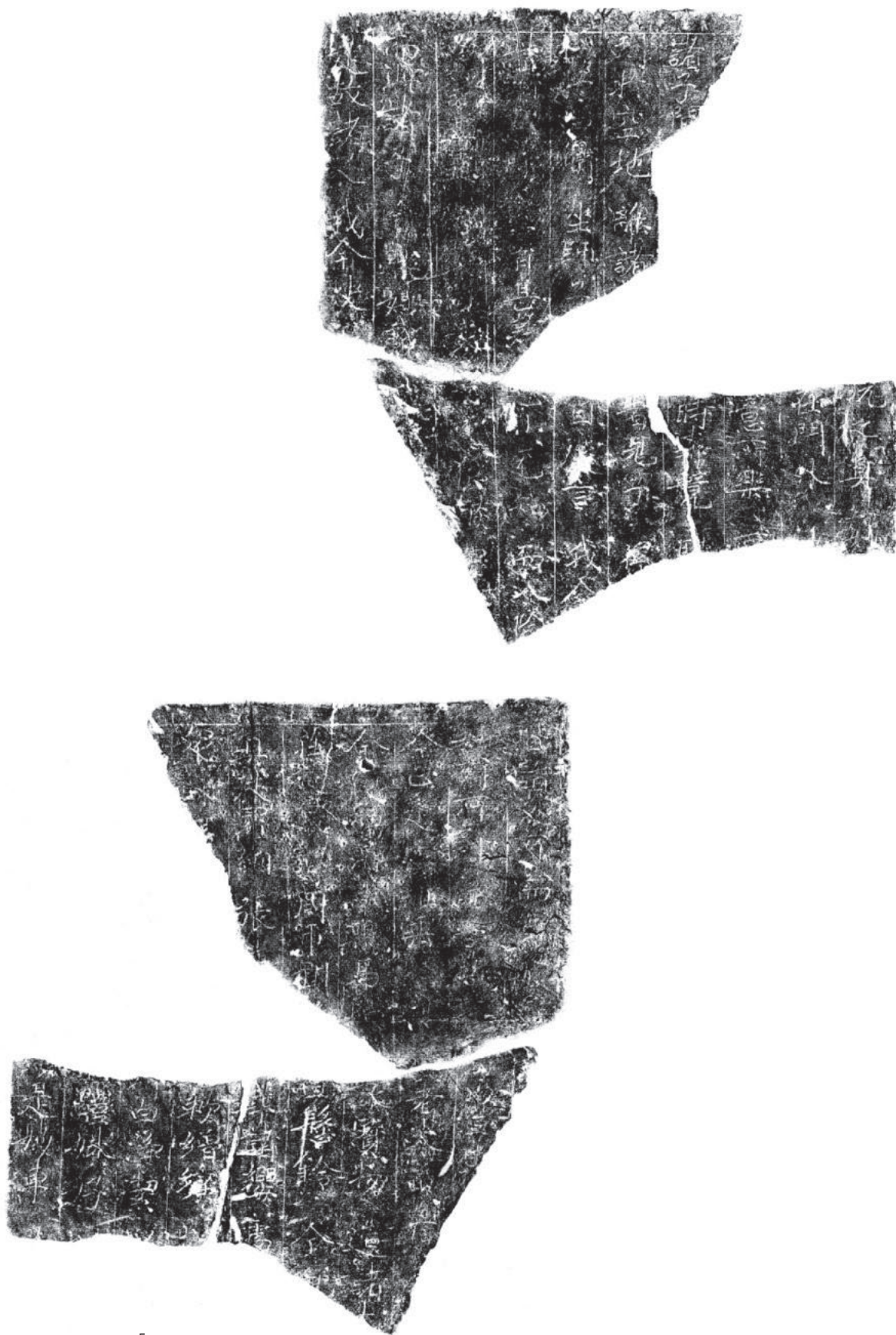
《ウラ面》

…□□佛智□……………
 □□是念若我但以□……………
 便為諸衆生讚如來……………
 不□以是得度所□……………
 老病死憂悲苦惱而為□……………
 猷解佛之智慧舍利弗□……………
 有力而不用之但以慙慙……………



第8図 復原個体H

<p>10 9 8 7 6 5 4 3 2 1</p> <p>三界火宅拔濟衆生爲說三乘聲聞辟支佛</p>	<p>10 9 8 7 6 5 4 3 2 1</p> <p>無量無邊佛智慧樂令其遊戲舍利弗如來</p>	<p>10 9 8 7 6 5 4 3 2 1</p> <p>已便作是念我爲衆生之父應拔其苦難與</p>	<p>1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17</p> <p>病死憂悲苦惱愚癡闇蔽三毒之火教化令</p>	<p>宅之難然後各□珍寶□……………</p> <p>□□力无所畏而不用□……………</p> <p>三界火宅拔□衆生爲□^(衆生)……………</p>
--	--	--	---	---



第9図 復原個体I

案を以下に示す。

10	多諸債從	而侍衛之	以是妙車	等賜諸子	10	是故諸人	我今快樂	爾時諸子	知父安坐
9	有大白牛	肥壯多力	形體姝好	以駕寶車	9	而此諸子	貪樂嬉戲	我已救之	令得脫難
8	上妙細氈	價直千億	鮮白淨潔	以覆其上	8	多諸毒蟲	魑魅可畏	大火猛炎	四面俱起
7	衆綵雜飾	周匝圍繞	柔軟繪續	以爲茵蓐	7	此諸子等	生育甚難	愚小無知	而入險宅
6	眞珠羅網	張施其上	金華諸瓔	處處垂下	6	住於四衢	坐師子座	而自慶言	我今快樂
5	莊校嚴飾	周匝欄楯	四面懸鈴	金繩交絡	5	到於空地	離諸苦難	長者見子	得出火宅
4	金銀琉璃	車馬腦	以衆寶物	造諸大車	4	諸子聞說	如此諸車	即時奔競	馳走而出
3	今正是時	唯垂給與	長者大富	庫藏衆多	3	如前所許	諸子出來	當以三車	隨汝所欲
2	皆詣父所	而白父言	願賜我等	三種寶車	2	如前所許	諸子出來	當以三車	隨汝所欲
1	告諸子等	我有種種	珍玩之具	妙寶好車	1	羊車鹿車	大牛之車	今在門外	汝等出來

經典での当該部位は、四字一句の偈文で構成される箇所であり、拓本をよく見ると四字ごとにやや間隔が広がることとがわかる。また、句頭の文

字位置が横に揃えられており、一行あたりの文字数は空白を含めた一九字分で配置されたのではないかと推測されたため、復原ではこの配置を採った。行数は各面一〇行となる。

天側にははつきりと匡郭線が看取でき、余白は九mmであった。オモテ面右袖側にも匡郭線らしきものが見えるが、判然としない。罫線幅は各面とも一九mmを基調とし、その前後一mm程度の範囲に収まるようだ。また、オモテ面の八行目と九行目の境界にあたる罫線に引き直らしいズレと重なりが見て取れることは興味深い。

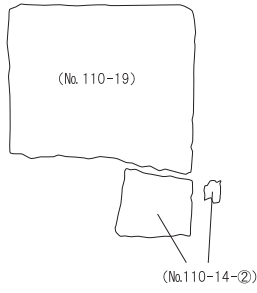
なお、当破片を先の復原案にもとづいて同一巻上で割り付けた場合、一四枚目ないし一五枚目に相当すると考えられる。

（二〇）復原個体J（第10図）

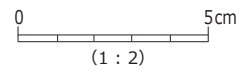
山根拓本三点に相当する破片ス・セから復原される個体である。破片セの拓本原品が東京国立博物館所蔵破片（B―二一七八―二）にあたること、さらに破片ス（山根拓本No.一一―一六）がこれに接続することを前稿で指摘した。その判読内容と復原案を再掲する。

《オモテ面》

- 告舍利弗 謗斯經者 若說其罪 窮劫不盡
- 緣我 故語 汝無 智人 莫說 此□
- 利根 智慧 明了 多聞 強□ 求佛 □□
- 乃可 為說 若人 曾見 億百 千佛
- 本□ 心堅 固如 是之
- 若人 精進 常□ 慈心 不□
- 若人 恭敬 无有 異心 離諸
- 如是 之人 乃可 為說 又舍



(*丁付と思われる拓本の位置は推定)



第10図復原個体J

なっていたかのような印象を受ける。またウラ面でも左袖から半分を超え
るあたりまでが黒色を呈している。両面の状況を踏まえると焼成時の黒斑
と理解できるかもしれない。

(一一) 復原個体K (第11図)

山根拓本一点が相当する破片ソから復原された個体である。当破片の拓
本原品が東京国立博物館所蔵破片(B-2178-1)であり、これにつ
いても前稿で紹介した。その判読と復原案を比較のため再掲しておく。な
お、前稿では上記復原案に基づいて当個体を同巻の二三枚目に相当すると
推定した。

《オモテ面》

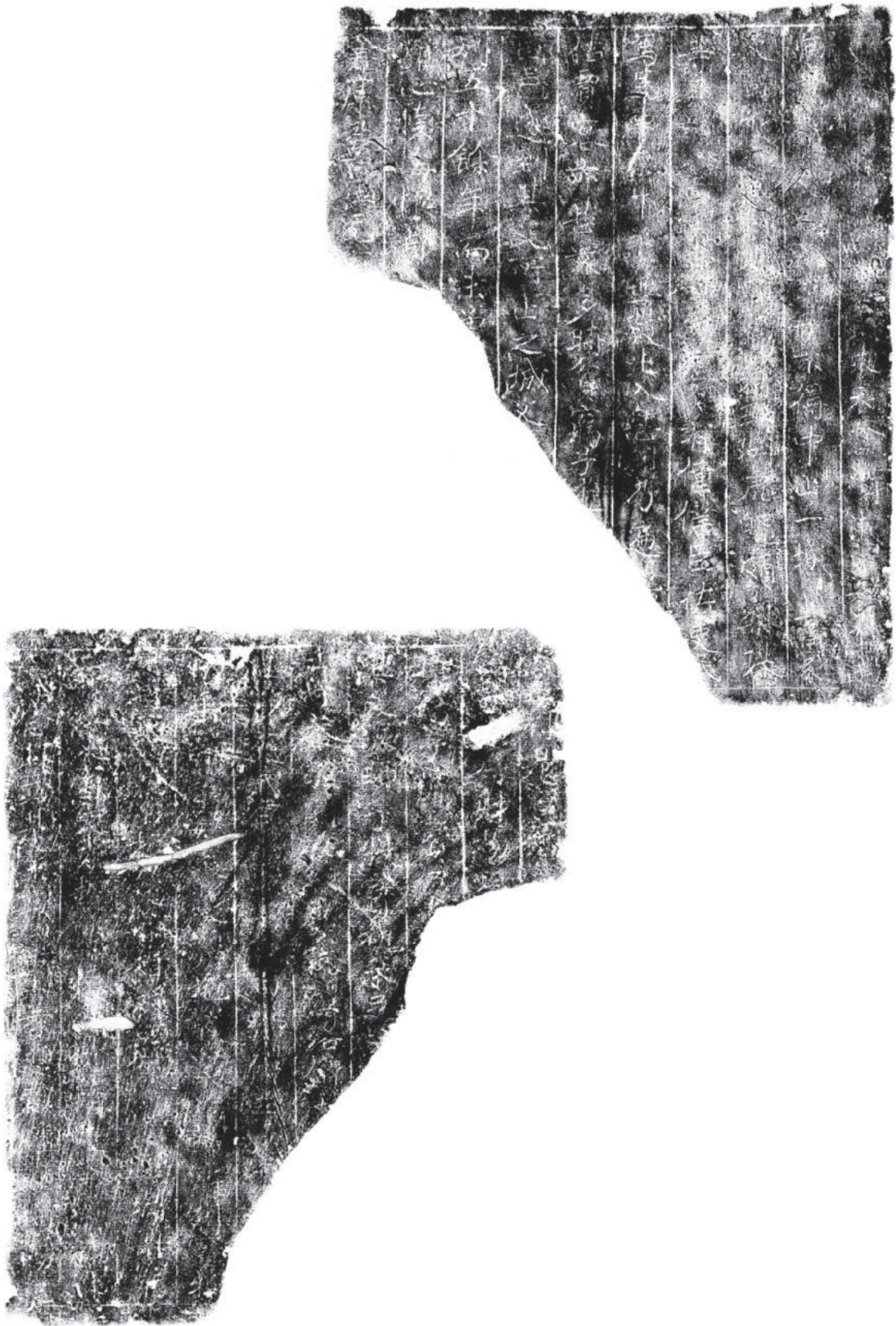
□□□□□□□□□□以求衣食漸漸□□遇
向□□□□□□□□□□不得中止一城其家
大富財寶□□金銀□□珊瑚虎魄頗梨珠
等其諸倉□^(摩)悉□□□□有僮僕臣佐吏□^(民)
□馬車乘牛羊無數出入息利乃遍□^(民)……
估買客亦甚衆多時貧窮子□……
國邑遂到其父所止之城□……
別五十餘年而未^(窮)□……
□心懷悔恨自^(窮)……
倉庫盈□无^(窮)……

《ウラ面》

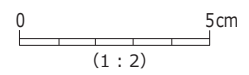
□□付是□□□□……
□□付財物□□……
□□子備賃□□……
□□師子□寶机承足□□……

8 7 6 5 4 3 2 1 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17

出	帳	其	士	其	時	得	所	倉	惟	別	國	估	象	等	大	向	加	1
内	垂	身	皆	父	窮	子	委	庫	心	五	邑	買	馬	其	富	本	復	2
取	諸	吏	恭	踞	子	委	付	盈	懷	十	遂	客	車	諸	國	窮	窮	3
與	華	民	敬	師	備	付	是	溢	悔	餘	到	亦	乘	倉	其	困	困	4
有	幡	僮	團	子	賃	財	以	無	恨	年	其	甚	牛	無	父	馳	馳	5
如	香	僕	繞	床	展	物	慫	有	自	而	父	衆	羊	皆	先	騁	騁	6
是	水	手	以	實	轉	坦	勸	子	念	未	所	多	無	盈	來	四	四	7
等	灑	執	真	机	遇	然	每	息	老	會	止	時	數	琉	求	方	方	8
種	地	白	珠	承	到	快	憶	一	朽	向	之	貧	出	璃	子	以	以	9
種	散	拂	環	足	父	樂	其	旦	多	人	城	窮	入	瑞	不	求	求	10
嚴	衆	侍	珞	諸	舍	無	子	終	有	說	父	子	息	珊	得	衣	衣	11
飾	名	立	價	婆	住	復	復	沒	財	如	母	乃	息	珀	中	食	食	12
威	華	左	直	羅	立	憂	作	財	物	此	念	遍	多	虎	止	漸	漸	13
德	羅	右	千	門	門	慮	是	散	金	事	子	他	有	珀	一	漸	漸	14
特	列	覆	萬	利	側	世	念	失	銀	但	與	國	僮	頗	城	遊	遊	15
尊	寶	以	莊	利	門	尊	我	無	珍	自	子	商	僕	梨	其	行	行	16
窮	物	寶	嚴	居	側	尊	若	無	寶	思	離	國	臣	珠	家	遇	遇	17



第11図 復原個体K



子見父有大力勢即懷恐怖悔來至此竊作
是念此或是王或是王等非我傭力得物之

拓本の原品となる東京国立博物館所蔵品は天とオモテ面右袖の小口が完
存し、かつ同左袖と地の小口面も一部が残るといふ、非常に良好な残存状
況にあり、この破片から原形の法量が容易に把握できる。高さ二四一mm、
幅は一九六mmを測る。先に見た復原個体Jと比較するとほぼ同じ値となる
ことがわかる。

刻字された描線は細く浅いが、文字の筆致は丁寧である。破片Hおよび
Jと似る。

また、この破片も板面の左右で色調が大きく異なり、オモテ面は右袖か
ら四行分（幅約八〇mm強）、ウラ面では左袖約四行分（幅約八〇mm）が黒
色を呈している。つまり、粘土板の片側両面が約八〇mmに互って黒くなっ
ている。さらにこの黒色と茶褐色の分を分ける境界は直線的で、破片J同
様、何か板状のものに覆われていたことを想起させる様相を示している。

（以下、後編に続く）

【註】

- (1) 中村直勝は京都における瓦経の知見が近世に遡ることを指摘している「中村
一九二六、七七〜七八頁」。
- (2) さらにその後、亀塚瓦経を所蔵する他機関（京都大学、黒川古文化研究所）
でも調査を行った結果、いくつかの拓本と連接する破片を確認することがで
きた。その内容の検討については別稿を草する予定である。

(3) なお、③は全部で十二紙が遺されており、うち十一紙分は山根拓本の積文で
あることが確認できている。③も校合過程の生成物と位置づけられよう。た
だし一枚だけ山根拓本・瓦経にない積文が含まれており、原品破片はいまの
ところその存在が確認できていない。

(4) 判読内容の翻刻にあたっては書写されている表記になるべく近いものを用い
たが、差異が小さい場合あるいは刻字の不鮮明さから正確を期すことが困難
な場合は、常用漢字を用いた。また翻刻で使用した記号については、「・・・」
欠損しているもののある程度の文字（または行）が存在するとみられる部分、
□…摩滅または一部欠損のため判読不能、を示している。

(5) 校合は、SAT大正新脩大藏経テキストデータベース二〇二二版 (<http://21d.zklit-tokyo.ac.jp/SAT/>) を主に用い、あわせて文字の異同や補注を「高楠
一九八九」により確認した。

(6) 本配置案に用いている文字は出典である『大正大藏経』のものを採用している。
また法華経は平家納経を根拠に八巻構成を採用し、各巻の構成は岩波文庫版
「坂本・岩本一九六二」に拠った。さらに文字の配置については前稿での成
果を踏まえ、まずは一七字×一〇行で復原した。なお、配置案では拓本及び
瓦経残存部分をゴシック体で示し、付加記号は以下の意味とした。圏点○…
拓本及び瓦経原品において脱漏、圏点●…拓本及び瓦経原品と異なる文字、
□囲み…拓本及び瓦経原品において摩滅または一部欠損のため判読不能だっ
たもの。

(7) 枚数の計算は、既存資料の丁付規則を参考にして經典各巻ごとに行った。た
だし、經典テキストデータの文字数を上述規格で割るといふ機械的な算出で
あるため、あくまでも目安である。

(8) 拓本はおそらくは原品採集者のもとで作成されたのであろう。それが出土地
を注記できた理由と考えたい。また仮に拓本自体を採集者から譲り受けたと
しても、やはり注記の存在は採集者との面談があったことをうかがわせる。

(9) 前稿で提示した判読内容についていくつかが修正すべき点を見つけたため、本

稿で提示した内容をもって訂正する。特に、ウラ面二行目の二文字目は「合」(前稿)ではなく「念」の異体字であること、したがって前項で指摘した当該文字での誤写は無かったことを明示・付記しておきたい。

【参考文献】

- 網干善教 一九八二「京都今熊野亀塚塚出土の瓦経について」『日本宗教社会史論叢』水野恭一郎先生頌寿記念、国書刊行会、一一三～一二五頁
- 石田茂作 一九五八「瓦経の研究」『瀬戸内考古』二一(のち、『佛教考古學論攷』三 經典編、一九七七に採録、三一八頁)
- 加藤俊吾 二〇一七「東京国立博物館所蔵今熊野亀塚瓦経と山根徳太郎旧蔵拓本」『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』第六七一号 東京国立博物館、七～二四頁
- 坂本幸男・岩本裕訳註 一九六二『法華経』(上)～(下)(岩波文庫青三〇四～一〇三頁)
- 杉山 洋 一九八五「京都の瓦経」『佛教藝術』一六二号、毎日新聞社、八一～一〇三頁
- 高楠順次郎 一九八九『大正新脩大藏経』第九卷法華部全・華嚴部上(普及版)大正新脩大藏経刊行会
- 中村直勝 一九二六「今熊野亀塚発見瓦経」『京都府史蹟勝地調査會報告』第七冊、京都府、七一～七九頁
- 難波田 徹 一九八〇「京都市立博物館蔵瓦経片の復原的研究」『MUSEUM(東京国立博物館美術誌)』No.三五二、東京国立博物館、四～一一頁
- 八尋和泉 一九八二「筑前飯盛山瓦経(前編)」『九州歴史資料館 研究論集8』、三三～一一六頁



(上) 通常写真撮影



(下) 多視点画像計測 (SfM/MVS) によって生成した3次元モデルから作成した正射変換画像

写真1 山根瓦経 No.109-4 (オモテ面)

*縮尺: 1/2



(上) 同前



(下) 同前

写真2 山根瓦経 No.109-4 (ウラ面)



(上) 同前



(下) 同前

写真3 山根瓦経 No.109-3 (右がオモテ面)

*縮尺: 1/2

The Imakumano Kamezuka Sutra Tablets and the Ink Rubbings Formerly owned by Yamane Tokutaro in the Osaka Museum of History Collection

KATO Shungo

Yamane Tokutaro (1889-1973) is a prominent historian who discovered and studied The Naniwanomiya Palace site. His personal effects are stored in the Osaka Museum of History. Among these were several sutra tablets and ink rubbings. These seem to have been collected by Yamane himself, and belonged to Imakumano Kamezuka sutra mound in Kyoto.

The Imakumano Kamezuka sutra tablets were discovered by chance in 1926, but since then no serious investigation has been carried out, and the details remain unknown. In addition to the fragments reported at the time of discovery, it seems that many fragments were collected. Other organizations also store fragments that are reportedly found in Imakumano Kamezuka sutra mound.

These ink rubbings collected by Yamane have been never known before. Therefore, it is important for revealing Imakumano Kamezuka sutra tablets which still does not fully understand. In recent, the author has determined that some of them are taken from the fragments held in the Tokyo National Museum Collection.

As a result of further arrangement and examination of the ink rubbings made by Yamane, it was found that the number of fragments recorded was 28, and 21 tablets were restored. This is a quantity that is almost equal to the number of fragments of the Imakumano Kamezuka Gakyo. The restored tablets will be used to restore the overall composition of the tablets.